

児童虐待防止について、それぞれの意見を出し合うパネリスト。佐賀市のメトロプラザ



2010年度の佐賀県中央児童相談所の相談対応件数は140件。過去最多となった。最も多い相談内容が、殴る蹴るといった身体的虐待の54件。家に閉じこめたり、食事を与えないなどのネグレクト(育児放棄)が38件、暴言やきよくだい間で扱いを差別するなどの心理的虐待が35件、性的虐待が13件だった。

児童虐待 県内状況



被害者の年齢は小学生から小学校入学前が21件の影響がある。57件、中学生25件、3歳以下、0〜3歳未満が20件。大阪の事件で関心、相談急増。加害者は実母が69件と最も多く、次いで実父44件、養母7件、養父6件などとなっている。相談対応件数はこの数年理由については「少子化や核家族化に加え、推挙していた。急増傾向について県母子保健福祉課は、大阪2児放置死事件について、

大阪2児放置死事件 2010年7月、大阪市のマンションで住民が異臭に気づき、3歳と1歳の姉弟が遺体で発見された。23歳の母親は「育児が嫌になった」などと約2カ月間、2児を部屋に放置したまま食事を与えず、衰弱死させたとして殺人罪で起訴された。1年経たずとも当時。

児童虐待防止を考えるシンポジウム(佐賀中部保健福祉事務所主催)が1月7日、佐賀市で開かれた。シンポでは、社会に「余裕」がなくなり、心を病む親が増えているという背景が指摘され、防止のためには親を育児ストレスから守り、孤立させない環境づくりを急ぐよう提言された。討議内容を詳報する。

児童虐待防止考えるシンポ

岩室 児童虐待の背景の一つは、親が心を病むことにある。心を病むのはストレスが原因となり、物事の優先順位が常識とかけ離れてしまうこと。大阪2児放置死事件の母親は「(自分が)外で遊ぶこと」を最優先し、子どもを家に置き去りにしたとされる。ストレスは、人間関係がうまくいかず、自らのこだわりや被害者意識を解消できないと発生する。これに対処する情報や経験、知識が足りないため、育児ストレスから逃げるように事件を起こす。「みんなうまく育てられないよ」「言うことを聞かないのが当たり前。少しみておこうか」という周囲のサポートがあれば、虐待は起きなかったか

余裕なくなり心病む親 負の感情はき出す場を 根深いネグレクト問題

岩室 親が起る背景に「子どもは親の所有物で、思い通りにならないと腹が立つ」という意識がないだろ。子どもは本来「授けられた命」を尊ぶべき。先づから受け継いできたという言葉を大切にしたい。吉村 「負の条件」がそろって誰しも虐待を起す可能性がある。不安や怒り、悲しみ、つらさをため込み、限界を超えようと心がフリーズして虐待してしまう。そんな時は負の感情をき出すし、心の空き容量を確保すればいい。母親が近所や仲間たちとつながり、安心して甘えられる環境を整えることを急ぎたい。

谷川 家庭が抱える問題が以前より複雑化、多様化している。社会に余裕がなくなり、生きにくくなったと感じる。虐待の中でも問題なのがネグレクト。発見が難しくケアが遅れてしまふ。特に親を通じて人への信頼感を身につける2〜3歳は一日も早く発見し、多面的な支援をしなければならぬ。地域のネットワークを強め、子どもを社会の財産として見守るのが重要だ。生後4カ月までの乳児がいる家庭を保健師が訪問する国の「こころにちばちゃん事業」に期待している。

育児ストレス解消へ 支援態勢づくり急務

コーディネーター 岩室紳也さん(36) 地域医療振興協会ヘルスプロモーション研究センター長 ■パネリスト 古川潤哉さん(35) 浄土真宗本願寺派浄誓寺僧侶 吉村春生さん(50) 西九州大学非常勤講師・スクールカウンセラー 谷川弘幸さん(65) 元佐賀県中央児童相談所長 菱岡智美さん(36) 神崎市母子保健推進員

2面からつづく 岩室 事業の理念はいいが、予算が少ない点の問題。介護保険や年金など高齢者への福祉施策は手厚いが、乳幼児へのサポートは少ない。子ども手当というやり方では親の遊興費に消える可能性があり、保健師を増やすなど児童福祉制度そのものに税金を使わなければならない。

菱岡 子ども3人を育てながら神崎市母子保健推進員を務めている。セーラスに間違えられたり、児童虐待の調査かと警戒されたりしたこともあった。訪問前に電話で知らせたり、健診や注射のお知らせ中心にしたりして、質問し過ぎないよう気を配る。古川 結婚、育児、出産の情報誌が私たちを縛っている。情報が多過ぎ、情報過多過ぎて戸惑いも。古川 市とお母さんのパイプ役になるよう心掛けていく。「多様化の時代」といわれる割には単一化・排除が進む社会になっていないか。いろんな親がいるが、自分の心より子どもを認めて、虐待防止策を考えた。谷川 「児童相談所は文句ばかり言う。私が支援を必要としていたとき

情報多過ぎて戸惑いも 古川 サークルの大切さ実感 菱岡

情報多過ぎて戸惑いも 古川 市とお母さんのパイプ役になるよう心掛けていく。「多様化の時代」といわれる割には単一化・排除が進む社会になっていないか。いろんな親がいるが、自分の心より子どもを認めて、虐待防止策を考えた。谷川 「児童相談所は文句ばかり言う。私が支援を必要としていたとき



「このままでは感情がコントロールできずに子どもを傷つけてしまう」。以前、取材した女性は、言うことを聞かない子どもに手を挙げた苦しい体験を語った。大事には至らなかったが「誰にも相談できなかつた。問題のある親とレッテルを貼られ、監視」さされるのが怖くて」。1人で苦

競争社会でひずみ拡大 競争社会で所得格差が開き、ひずみはさらに広がっている。学校が放課後に子どもの思いや悩みを受け止めた。と。競争社会で所得格差が開き、ひずみはさらに広がっている。学校が放課後に子どもの思いや悩みを受け止めた。と。

論説ライター

論説ライター

FROM THE LIBRARY

FROM THE LIBRARY